

題目:仔ウマの社会関係の構築に関する観察研究-母ウマの親和的社会交渉が与える影響に着目して-

氏名:田中未菜

指導教員:瀧本彩加

群れで暮らす社会的な動物は、他個体とともに過ごす時間が多く、一緒に眠ったり、毛づくろいをしたり、遊んだり、ごはんを食べたりする。こうした他者と仲良くするような関わりあいを親和的社会交渉 (affiliative social interaction) と言う (Cameron, Setsaas, & Linklater, 2009)。親和的社会交渉が動物の生活において重要であることは知られてきた。が霊長類では、子どもの親和的社会交渉が母の親和的社会交渉に大きく影響を受けて発達することが分かっている (e.g., de Waal, 1996)。では、霊長類に見られるような親和的社会交渉における母子間の類似は、霊長類以外の社会的哺乳類においても見られるのだろうか。本研究では、親和的社会交渉の重要性が繁殖成功度との関連からも示唆されているウマを対象とし、群れで暮らすウマの母子の行動観察を通して、母ウマの親和的社会交渉が与える影響に着目しながら、仔ウマの社会関係の構築について検討した。近接相手・割合については、離乳前においてのみ、性別によらず、母子の近接相手・割合が有意な正の相関を示した。つまり、母子間の物理的近接によって、母ウマ同士の近接が仔ウマ同士の近接に影響し、母ウマ同士が頻繁に近接するほど、その仔ウマ同士も頻繁に近接するということである。毛づくろいや遊びの相手・回数については、離乳前の仔メスにおいてのみ、母子の毛づくろい相手・回数が有意な正の相関を示した。つまり、母子間の物理的近接によって、母ウマ同士の毛づくろいが仔メス同士の毛づくろいや遊びに影響し、母ウマ同士が頻繁に毛づくろいをするほど、その仔メス同士も頻繁に毛づくろいや遊びをするということである。この結果は、旧世界ザルに見られる母子の親和的社会交渉の類似における性差・特徴と一致する。母子間の近接の程度と離乳が母子間の毛づくろい (仔ウマは遊びも含む) の相手・回数の類似度に与える影響については、母子間の近接割合の程度の主効果のみが有意傾向であった。母子間の近接の程度が高い母子では、低い母子でよりも、母子間の毛づくろいや遊びの相手・回数の類似度が有意に高い傾向が見られた。この結果は、離乳前後にかかわらず、母ウマと仔ウマが頻繁に近接していた母子の方が、母子間の毛づくろいや遊びの相手が類似することを示唆している。本研究には観察時間・データ量の不足などで不十分な点もあるが、本研究がウマにおける社会関係の構築の発達過程に関する研究への興味・関心が高まるきっかけに少しでもなったなら、幸いである。